

「オクラの花粉(1)」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

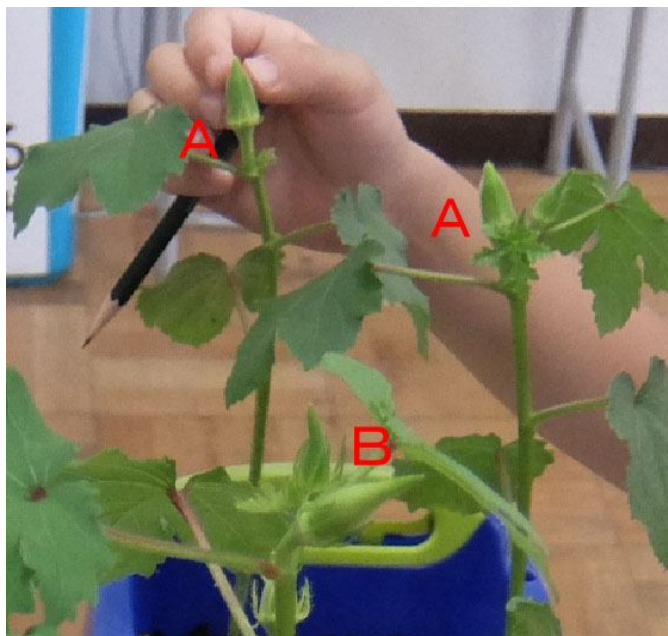
来週の3連休のあとは終業式だ。だんだん持ち帰る荷物が多くなる。計画的に持ち帰らせないと、終業式の日には、子どもたちはサンタクロースになってしまう。中でもオクラの鉢が一番大変だ。保護者会の時に、お母様方に持ち帰ってもらうのが普通だろう。しかし私は3年生には「自分で育てたオクラは自分の手で」持ち帰ってもらいたいと思った。



今週はその「お持ち帰り週間」である。夏休み前の最後の観察会“オクラ博覧会2017”を開催した。自分のオクラの鉢を机の上に置いて、互いに観察し合う。



中にはまだ花や実が1つもついていない鉢もある。班の全員がそんな状態の場合は、他の班で状態の良いものを借りてきて観察することにした。こういう場合、実に苦もなく交渉が成立するものだ。



オクラは「**B**花のつぼみ」と「**A**若い果実」の見分けが難しい。花のつぼみは、先が尖っていて、咲く寸前でも実よりは若干小さい。若い果実のほうはドングリ型で先端もあまり尖っていない。子どもたちは「実のまわりらへんに細かい毛が生えている」「何か少しオクラっぽい匂いがする」といったことに気付いた。



アオイ(葵)の仲間であるオクラの花は、清楚で実に美しい。野菜の花の中では最も美しいと、私は思う。初夏から秋にかけて毎朝次々と咲くので、観賞用の植物としても価値がある。実際に江戸時代には、食用というより観賞用の植物だったらしい。この花は、直前に子どもが水を与えたので、花卉に水玉がついていた。オクラの花を触っていた子どもが気付いた。「あれ?先生、何か指に黄色い粉っぽいのがついたよ。」